

富山県猿害地域における地域住民の
ニホンザル観の研究

竹内潔, 檜垣まり, 宮田裕隆 (富山大・人文・文化人類学)

1970年代からニホンザルによる農作物被害が生じている富山県東部の大山町, 上市町, 立山町において, 猿害の実状と猿害に対する地域住民の意識態度について聞き込み調査をおこなった。

猿害を被っている地域は, 高齢化が進む山間部の小集落が多く, 自家消費用の作物が被害を受けている。被害される作物は, この地域で耕作されている37種類の作物のうち34種類にのぼり, わずかにサトイモなど3種類が被害を免れている。なお, 最近では過疎化の進行に伴って, 猿害が平野部に拡大しつつある。猿害の防止策としては, ネットや電気柵によるサルの侵入防止, 爆竹, ロケット花火, 爆音器, 空砲, 鍋を用いた音による威嚇などが用いられている。ネットと電気柵以外は恒常的な防衛手段としては有効ではないが, 柵は設置費用や保守点検の労力がかさむため多用されてはいない。また, 毎年一町あたり数頭から数十頭が鉄砲で駆除されている。

地域住民のサルに対する意識態度は, かなりアンビバレントなものである。サルを「山の衆」と呼びならわしてきた地域住民にとってサルはその賢さや人間に似た仕草に親しみを覚える存在であると同時に, 小賢しく, 薄気味の悪い存在である。実際に猿害にあっている人々の間では, 後者の負のイメージが増幅されて前面に押し出される。しかし, その一方で, 住環境を破壊されて人里に降りてこざるをえなくなったサルに過疎化が進む自分たちの生活を重ね合わせて理解しようとする人々も少なくはない。

酵素多型を用いたヤクシマザルによる
種子散布様式の解析

渡辺幹男・芹沢俊介 (愛教大・生物), 野間直彦・湯本貴和 (京都大・生態研センター)

平成9年度は, サルの糞および頬袋による種子散布される植物のうちアコウの酵素多型解析およびDNAによる解析の準備を行った。昨年度までの調査によって多数の変異があることが明らかになっているアコウ (30個体で20パターンの遺伝的タイプ) で母樹を特定し, 稚樹のサンプリングをした。しかし, 多型が多く酵素多型のみでは親子鑑定等は不可能であった。そこで植物体からDNAの抽出をおこない, 酵素多型に加えてたくさんの変異が得られる可能性のあるマイクロサテライトマーカーの開発に着手した。

また, 頬袋による種子散布の結果と比較し, 様々なさる散布植物を用いて糞と頬袋による種子散布パターンの違いを明らかにする準備をした。

さらに前年度行った, イヌビワ・マテバシイ以外の植物についても酵素多型解析を行い, 多型の得られる材料を探した。